

法学部

三浦 薫先生推薦

『ハリネズミの願い』

トーン・テレヘン著
(新潮社)

「親愛なるどうぶつたちへ　ぼくの家遊びに来ようキミたちみんなを招待します。」ハリネズミはペンを噛み、また後頭部を搔きその後書き足した。「……でも、だれも来なくてもだいじょうぶです。」

オランダの児童作家、トーン・テレヘンが医師の仕事の傍ら大人向けに書いたものだ。勇気を振り絞って書いたこの手紙をハリネズミは結局出すのをやめて戸棚にしまってしまう。ハリネズミには友達がいない。臆病で、自分のハリが大嫌いな劣等感の塊だ。しかし、手紙を出さなかったら動物たちが「招待されてないから行かないよ」と語り合う場面も想像できる彼は、勇気を出して行動することが必要なことも知っている。でも結局行動は起こせない。ひたすら、クマが、ヒキガエルが、クジラが来たら、と悶々と延々と悩み続ける場面は、今時の表現を使えば、イラっとさせられる。しかしながら彼の想像の中の動物たちは、その特徴を見事に捉えられており「あ、こういう人いる」の連続でもある。「人生も幸福も死も小さすぎて目に見えないけど、だからこそしっかりと存在している」と哲学的な表現も光る。

誰かと結びつきたいという願いは誰にもある。幼いうちは、近づきたい相手に素直に近づけるが、少し成長すると躊躇する。私より他の子と遊びたいのでは、自分の友達にはなってくれないのでは、と。自分に自信が持てない、でも持てないことを発信することで、誰かにわかってほしい、慰めて欲しい……いまのSNSに似ている。

「ネタバレ」になるので、結末はぜひ自分で読んでほしいが、「この世のどこかに、そのままのあなたを愛してくれる人が必ずいる」そして「その人は、あなた自身が行動することで、必ず現れる」「見えないものを、恐れてはいけない」と教えてくれる。起承転結を求めて読むと退屈な本と思うかもしれないが、谷川俊太郎が「かわいくて怖い童話」と評する大人の本である。